

まちづくり、健康づくり、絆づくりも含めた

総合的・包括的医療へ

— 離島の利点を活かす奄美医療生活協同組合 —

青木 美紗

(奈良女子大学大学院生活環境科学系助教)



櫻田祐一理事長

高度な医療技術の開発、質の高い医療の提供、国民皆保険制度など、日本の医療制度は先進国の中でも有数の高水準であると評価されている。しかし、このような世界に誇る医療福祉分野においても、医療費抑制政策などの経済効率性を追求した国家施策や経済格差の拡大により、まともに医療サービスを受けることができず、「患者になれない病人」が続出している。特に地理的に不利な地域における病院、医師不足は深刻な問題となっている。

一方で、このような厳しい社会情勢だからこそ、単なる医療ではなく地域住民が主体となった医療を目指す医療生活協同組合がある。本稿では、地理的に不利とされる離島のひとつである鹿児島県奄美大島に本部を構える、奄美医療生活協同組合（以下「奄美医療生協」とする）を取り上げる。2014年に創立60周年を迎える奄美医療生協では、その前身である奄美診療所が1954年に開設されて以来、「地理的離島はあっても命に離島があってはならない」というスローガンを掲げ、「患者の立場にたって親切でよい診療を行い、力を合わせて働く人々の生命と健康をまもること」を目的に医療活動を続けている。本生協がどのような歴史を歩み、そして協同組合としてどのような地域医療をめざしているのか。2013年12月6日に櫻田祐一理事長にお伺いした内容をもとに紹介したい。

奄美医療生協の概要

奄美医療生協は、鹿児島県奄美市および大島郡全域を定款区域（図1）とし、奄美市に本部を置いている。本部のある奄美市名瀬には、2011年8月に新築移転した真新しい奄美中央病院がある。この病院は本

医療生協の中で最も大きく、110床の病床や高度な医療設備を備えており、組合の事業活動である医療事業や福祉事業（表1）などの拠点病院の役割を果たしている。中央病院以外にも区域内に診療所や介護施設を設けており（表2）、近年は進む高齢化に対応するために介護施設の充実を図っている。

2012年時点における組合員数は、27,336人となっている。これは奄美群島全人口の約23.4%であり、特に南大島区の瀬戸内町に関しては、地域内人口の46.7%が本生協の組合員となっている。1990年時点の組合員数は1万人未満であったので、20年間で2.5倍以上の伸びとなっている。また出資金額についても年々増加傾向にあり、2012年度では4億4千万円程度となっている。組合員のほとんどは、患者として病院に行くことがきっかけとなって生協に加入しているが、近年は奄美群島内の高齢化が急速に進んでいることもあり、コミュニケーションを図ることを望んで組合員となる高齢者もいるようだ。区域内には、組合員活動の拠点となる支部が16ヶ所あり、健康づくりなどの活動が実践されている。

奄美群島内には、総合病院として県立病

院と私立病院が1つずつある。しかし、区域内全人口の5分の1以上を組合員とする奄美医療生協は、地域に根ざした医療を確立する基盤を備えているともいえるだろう。

表1 奄美医療生協における事業内容

事業種目	主な事業品目
医療事業	外来、入院、訪問診察、健康診断、予防接種
福祉事業	老健入所・短期入所、訪問看護、訪問介護、通所リハビリテーション、訪問リハビリテーション、居宅介護支援、保育、病児・病後児保育
医療福祉等付帯事業	売店

表2 奄美医療生協事業所一覧

所在地	事業所（病院、診療所、介護施設）
奄美市	奄美中央病院
	訪問看護ステーションあまみ
	生協ヘルパーステーションあまみ
	生協在宅サービスセンターあまみ
瀬戸内町	南大島診療所
	老人保健施設せとうち
	訪問看護ステーションせとうち
	生協ヘルパーステーションせとうち
徳之島	徳之島診療所
	訪問看護ステーションあまぎ
	生協ヘルパーステーションとくのしま
	生協在宅サービスセンターとくのしま

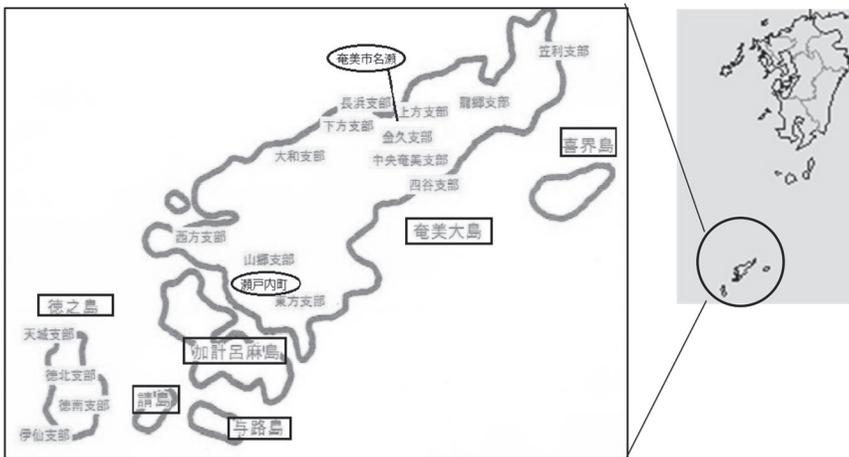


図1 奄美群島における奄美医療生協支部
出所) 奄美医療生協パンフレットより筆者作成。

奄美医療生協の歴史

奄美群島という離島で、医療・福祉事業を展開している奄美医療生協は、なぜ協同組合として誕生したのだろうか。本節では、その歴史と変遷について述べる。

奄美群島が日本に返還されたのは、第二次世界大戦の終戦から8年後の1953年であり、2013年の今年には日本復帰60周年を迎える。日本復帰当時、奄美郡民の健康状態が非常に好ましくない状況であったが、群島内に医療設備はほとんどなく、また国民皆保険制度が整備されていなかったため、医療を必要としている人たちが医療を受けることができない環境であった。この状況を見かねた全日本民主医療機関連合会(以下、民主医療機関連合会を「民医連」とする)が、奄美郡民の健康を守るセンターとして民主診療所を建設することを総会で全会一致により決定した。そして東京民医連から医師と看護婦が派遣され、島民が紬¹⁾工場の一角に診療所となる場所を提供した。この診療所が、奄美医療生協の前身となる奄美診療所(図2)であり、日本復帰翌年の1954年に開設した。

当時、離島にある診療所の最大の課題は、医師確保であった。しかし、九州民医連の



図2 紬工場の一隅に開設した奄美診療所

協力などもあり、1961年には奄美大島南部に南大島診療所が開設することとなった。さらに1965年には、奄美大島の南にある離島、徳之島に奄美診療所徳之島分院が開設された。これらの診療所は、「かかりたいときにかかれる病院を創りたい」という住民の熱い思いから、住民が出資することで開設に至ったものであり、南大島診療所の出資者によって南大島保健生活協同組合が結成された。また、1966年には鹿児島大学の医学生を研修に受け入れる体制を整え、離島医療の困難さややりがいを学ぶ場を提供し、確実な医師確保に貢献した。

1968年に財団法人奄美健康会議に改称し、徳之島分院は徳之島医療生活協同組合が運営する徳之島診療所として独立することになった。これ以降、奄美群島内の医療事業は、財団法人奄美健康会議、南大島保健生活協同組合、徳之島医療生活協同組合の3法人によって担われることとなった。この3法人体制が約22年間継続したのであるが、より多くの奄美郡民に医療を提供したいという思いから、より効果的に力を発揮するためには奄美群島全体を視野に入れ各法人が連携する必要性が高まった。そして1990年に3法人が合併し奄美医療生活協同組合が誕生したのである。奄美医療生協発足後も、住民が必要とする医療を実現するために、救急医療や新技術の導入を進めるとともに、進む高齢化には老人医療を拡充することで対応してきている。

戦後から今日にかけて、住民の思いを医療という形で実現してきた奄美医療生活協同組合は、来年60周年を迎えるにあたって、より時代や地域住民のニーズに合わせた医療福祉を展開するために大きな転換点を迎えている。これについて次節以降で見ていくことにする。

離島であることの困難性と魅力

離島医療と聞くと、設備が整っていない、最新の医療を受けることができないなどの難点のみをイメージする方が多いのではないだろうか。実際、移植医療や人工心臓が必要になったときは島外に出なければならぬこともあり、また移植に関しては本土まで時間がかかることによりドナーからの臓器提供をあきらめざるを得ないこともある。このような地理的な乖離に加えて、医師不足、最新技術の知識を習得する機会の少なさなどの物理的困難性もある。現在は高次医療を担う県立大島病院も、1990年代には本土からの支援が一時的に手薄となり、医療規模の縮小を余儀なくされた時期もあったそうである。これらの困難性に加えて、「離島だから仕方がない」といった一種の諦めともとれる「心の離島」も大きな問題であると檜田理事長は考えている。

技術面に関しては、県立病院や私立病院でも整い始めており、医療機関そのものが存在しないという状況は抜け出すことができている。しかし、一人暮らしの高齢者が増加し、病棟での医療だけではなく退院後のケアも必要な状況へと移り変わっている。国内の各地域と同様に、奄美群島でも既存の地縁社会が崩壊しかかっており、一人暮らしの高齢者が助け合うためには地域での新たな繋がり構築が必要になってきた。高度経済成長の終焉を迎え、少子高齢化を迎える中で、地理的・物理的へだたりを克服するための技術や施設の向上だけでは医療として成立しない時代が到来している。このような社会変容の中で、離島という小さなコミュニティでは顔の見える医療を提供することができる。例えば、南大島診療所の医師は1人ではあるが、加計呂麻

島に船で往診に出向うだけでなく、1年を通して南大島地区や周辺の離島において医療講演会を行いながら地域内を巡回している。また、離島医療現場の職員は、自分の専門外のことにも携わらなければならないことにより、自分が診なければならぬという責任感を持って患者と向き合っている。奄美医療生協は、離島に本部を置くことで郡民に全力を注ぐことができることに加えて、小さなコミュニティという離島の利点を活かすことで、住民に安心できる医療を提供することができ、職員のやりがいにも繋がるという大きな魅力を秘めている。

新たなつながり構築への取組み

一人暮らし高齢者が急増している奄美群島内において、病気の予防、退院後のケアなど病院外での健康づくりや地域づくりなどの暮らし全体のサポートが重要になってきていることは前途の通りである。ここでは協同組合ならではの奄美医療生協の取組みについて述べる。

(1) 班会の役割

医療生協では、近隣組合員や同じ趣味を持つ組合員などで3人以上集まれば班を形成することができる。奄美医療生協では、2013年3月時点において125班1,045人が年間1,000回以上の班会活動を行っている。班をまとめる支部は、区域内に16支部あり、支部ごとに健康づくりや地域づくりのイベントも開催している。

班会の内容は、定例班会に加えて、「食の満腹班」「手芸班」「カラオケ班」「ヨーガ班」「硬筆班」など趣味の班会もあり多様な活動が行われていることがわかる。中には班長の農園で野菜の栽培や収穫を楽し

む班もあるようだ。これらの班会は、組合員が顔を合わせて健康チェックや病気の予防、福祉制度や平和についての学習をすると同時に趣味を楽しむ機会となっている。班会には、組合員だけでなく地域在住の非組合員も参加することができる。この形態は、近年拡大している消費生活協同組合の「パーティ」²⁾に似たものがある。また、これらの班会は支部活動や行政との活動の基盤ともなっている。例えば、大島北部に位置する笠利支部では、「組合員の家」を設立し、班のメンバーやその地域の組合員が持ち寄りパーティを実施することで安否確認を行っている。大和村では支部と行政が協力して班をベースに健康管理活動を実践している。

班会に参加している組合員はまだまだ少ない状況ではあるが、地域づくりやつながりづくりも含めた健康づくりには大きな役割を果たす可能性があるといえる。今後、若年層の組合員が積極的に班会に参加できるようにすることが課題となっている。

(2) 協同組合間連携によるくらし全般をサポートする仕組みづくり

健康づくりのためには食や住は欠かせない。奄美医療生協では、食を専門とする生活協同組合コープかごしまとの連携を図っている。群島内には、コープかごしまの支部があり、個配を利用する住民がいる。これまでの活動実績には、奄美医療生協の班活動で、コープかごしまの職員が食の安全についての講演を提供したことがある。今後も、消費生協の子育て中の若い組合員を対象に医療生協の職員が子育てに関する講演を行うことや、生協商品配送時に医療生協のヘルパーを派遣して健康チェックや安否確認を行うなどによる連携を視野に入れていきたいと考えている。実行に移すには

壁も多いようであるが、離島やへき地にある限られた貴重な資源をいかに最大限に活用するか、という点で協同組合間連携が重要な役割を果たしそうである。

奄美医療生協がめざすもの

奄美診療所の開設以降、社会は大きく変化してきたが、奄美医療生協のスローガン「地理的離島はあっても生命に離島があってはならない」は60年間受け継がれてきた。60年目を迎えるにあたって、より一層地域のニーズに合わせた医療福祉を提供し、このスローガンを時代に合わせた形で達成するための具体的方針として「奄美医療生協の基本理念」が2013年に策定された(表3)。医療機関として、最新の技術や施設を整備することはもちろんではあるが、それだけでなく地域住民や行政との連携によって、病棟から退院後までを生協がサポートするような総合的・包括的システムの構築が目指されている。この点は、組合員が主体となって活動する医療生協だからこそ実現可能なものであり、他の医療機関とは大きく異なる点であるだろう。



奄美中央病院の玄関に掲げられているスローガン

表3 奄美医療生協のスローガンと基本理念

奄美医療生協のスローガン	
地理的離島はあっても生命に離島があってはならない	
奄美医療生協の基本理念	
1	人間の尊厳と人権の尊重を基本とし、医療と介護を患者・利用者との共同の営みとして実践し、納得と安心を得られることを追求します。
2	離島であることによる医療や介護の格差解消に努め、進歩する医療や介護に対応した技術の構築や安全性の追求など質の向上に取り組みます。
3	地域の事業所、行政機関との連携を重視し、地域の組合員活動を支え、地域まるごと健康づくり・安心して住み続けられるまちづくりに貢献します。
4	憲法がくらしに活かされるよう、平和と民主主義の発展、社会保障の拡充をめざした取り組みをすすめます。
5	生活協同組合の組織として助け合いの精神を基本に、民主的運営を貫き、働きやすい職場づくりをすすめ、事業の発展と生協組織の強化に努めます。

このような協同組合であることの重要性を、今後どのように若手職員に伝えていくかが最大の課題である。医療だけではなく、地域の中に入っていけるような人材の育成を目指している。2014年には60周年記念誌の発行が予定されており、奄美医療生協の役割を再確認すべく、檜田理事長自らが資料を作成し、若手職員を対象に勉強会も開催している。また、職員だけでなく組合員も自ら積極的に活動することが必要であり、患者として組合員となった人たちが班会などの組合員活動に参加できる環境整備も重要である。現在、奄美医療生協で勤務する看護師や技術系職員は奄美群島出身者がほとんどを占めているが、医師に関しては奄美群島出身者であっても本土で勤務する傾向が続いている。奄美群島で育った子どもたちが奄美医療生協の魅力を感じて、10年後20年後にそこで医師として勤務したいと思ってもらえるような持続可能な医療福祉施設にしていきたいと、理事長は熱く語っておられた。

離島というハンディキャップはゼロにはならないかもしれない。しかし離島という小さなコミュニティに潜む大きな利点を活

かしながら、住民主体の医療福祉を展開する奄美医療生協は、日本全国の地域活動に大きなヒントを与えてくれるだろう。



奄美医療生協病院

- 1) 奄美大島では大島紬が伝統工芸品として有名である。本場奄美大島紬協同組合が活動している。
- 2) 詳細は『くらしと協同』（2013年秋号）参照。

【参考文献】

奄美医療生協同組合『2013年度第36期通常総代会議案書』。
 奄美医療生協同組合『第36期（2013年度）通常総代会資料集』。
 奄美中央病院新築移転記念誌編集委員会、『想いをかたたちに！地域に根ざしたわきゃが病院』。本場奄美大島紬協同組合ホームページ
<https://sites.google.com/site/honbaamahonbaamahonbaam/>。